

資 料

徳島大学白菊会の活動と今後の方向性

梅 本 ひとみ¹⁾, 福 井 義 浩²⁾

¹⁾徳島大学大学院医歯薬学研究部解剖教育支援室

²⁾同 機能解剖学分野

(平成29年1月24日受付) (平成29年2月6日受理)

徳島大学白菊会の沿革

徳島大学白菊会は昭和42年8月31日(1967年)に発足して、今年で50年を迎える。延べ約2800名が会員登録していただいております。生存会員は約1100名である。現在、年齢・性別に関係なく、親族等の同意を条件に入会を受け付けている。親族のいない方は、老健施設やグループホームなどの施設長、医師等の同意を条件に入会を認めている。白菊会発足当初は解剖実習に必要なご遺体が集まらず、本人希望で入会した方ばかりでなく、遺族や入所施設長、福祉事務所からの申し出によっても引き取りを行っていた。平成10年頃からは、会員以外の遺体の引

き取りは年1体程度となり、平成19年度以降はすべて会員からの献体となった。

さだまさし著「眉山」が映画化され、徳島大学内でも撮影が行われ、平成19年に映画が公開された。映画公開とともに「献体」という言葉と意義が世間に知られるようになり、入会希望が増えた。しかしながら、映画公開の数年前から、入会者数が増大しており、平成18年度から入会申込書の配布を年40人と制限を行った。

その後、医師・歯科医師を対象とした臨床医学の教育・研究のための施設としてクリニカルアナトミー教育・研究センター設置を機会に、平成27年度からは入会制限を廃止した(図1)。

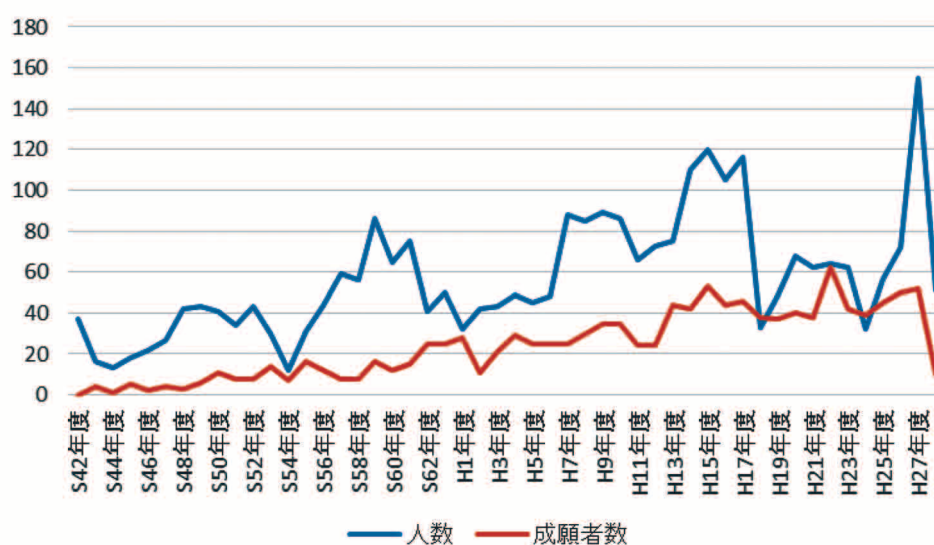


図1 会員数と成願者数
昭和42年度から平成28年12月までの推移

白菊会の活動

毎年6月の白菊会総会では、前年度の新入会会員の紹介、議事、講演会等を行っている。また、県内4地区に分けた地区集会を4年に1度、それぞれの地区ごとに行っており、会員の方々の交流を図っている。

毎年10月に行われる解剖体慰霊祭に際しては、白菊会会員と医・歯学部学生との懇談会を行っている。懇談会の終了時に参加学生は実習の感想を発表し、会員の方々には学生の真摯な思いを知っていただける貴重な時間となっている。

総会や地区集会、学生との懇談会等を通じて、多くの方に参加をしていただいております。献体の意義を広めることに努めている。

ご遺骨の返還・納骨について

平成10年度から遺骨返還・感謝状贈呈式ならびに、解剖体納骨式・追悼式を行ってきた。平成19年度は、解剖実習のカリキュラムの変更が行われ、遺骨返還式等を行っておらず、平成28年度で18回目にあたる。遺骨返還式・解剖体納骨式を大学の行事として行う以前は、解剖学教授が個別にご遺族宅を訪問して遺骨返還と感謝状の贈呈をしていた。しかし公用車運転手の退職に伴い、個

別訪問は廃止し、遺族に徳島大学に来ていただき徳島大学の行事として遺骨返還を行うようになった。個別にご遺族宅を訪問して遺骨返還を行っていた時は、日程調整等事務方の負担も大きかった。年度末の遺骨返還に関する日程調整は入試の多様化もあり、止めざるを得なくなった。しかし会員・ご遺族からの遺骨返還式典に対して評判は良い。

現在、直径7.5cm×高さ8.3cmの小さな陶器製の骨壺を使用して納骨堂に802体の遺骨が納められている。遺骨の返還はご遺族に任せているが、近年は遺骨の引き取りをしていただけるご遺族の方が減少しており、約半数の方が徳島大学の納骨堂に納骨している。

遺骨の返還まで1年から3年ほどかかっているが、その間にご遺族の転居による連絡先不明や死亡などの理由によって、返還ができなくなるケースも一部ある(図2)。

徳島大学白菊会では、平成7年に入会申込用紙の様式を変更し、入会申し込み時に本人の希望として、遺骨の「遺族へ返還」もしくは「納骨堂へ納骨」の項目を増やした。それ以前は入会時の要望として記入していただいていた。移籍転出、不成願、退会者を除く会員の希望を確認することができた1589人のうち、1035人が納骨室を希望しており、65%である(図3)。さらに、成願者に限ると、64%が納骨堂を希望していた(図4)。

近年の入会数増加や納骨希望者の比率増加により、今

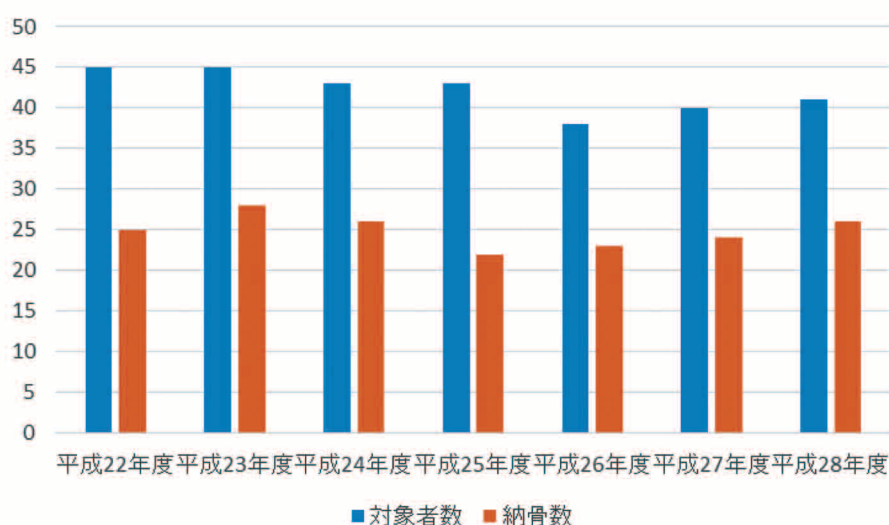


図2 遺骨返還対象者と大学への納骨数
過去7年間の遺骨返還対象者と大学への納骨数の推移であり、納骨数が半数を超えている。

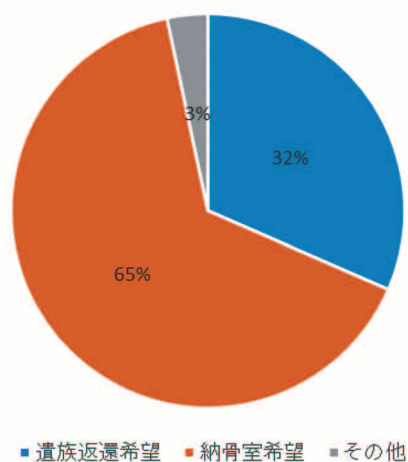


図3 遺骨取り扱い希望
入会時における会員本人の遺骨の行方の希望を確認できた1589人のうち、65%の1035人が納骨堂を希望していた。

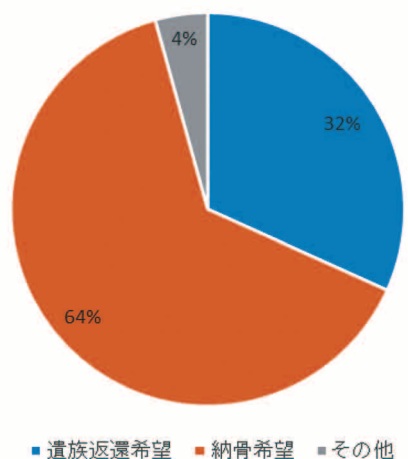


図4 成願者の遺骨の取り扱い希望
成願者1204人のうちで入会時に希望を確認できた627人のうち、64%の401人が納骨堂を希望していた。

後は大学納骨堂への納骨が増加することが予想される。遺骨の取り扱いについては、遺骨返還あるいは納骨の二者択一ではなく遺骨の保管方法に関して今後検討する必要がある。今後も献体をしていただいた白菊会会員やご遺族の希望に添う形で遺骨を取り扱うのが望ましいが、時代の変遷とともに合葬なども将来検討することも必要になるであろう。

クリニカルアナトミー教育・研究センターの活動について

腹腔鏡手術や内視鏡手術など高度で先進的なさまざまな手術手技が開発されているが、安全で確実な医療技術を習得するためにはトレーニングが必須である。平成24年に日本外科学会・日本解剖学会から「臨床医学の教育及び研究における死体解剖のガイドライン」が公表され、手術手技研修や先進的な医療技術の開発などの目的でご遺体を使用できるようになった。徳島大学では、平成25

年に臨床解剖学教育・研究センターが開設され、医学部・歯学部学生の解剖実習のみならず、医師・歯科医師のための手術手技の研鑽、新しい先端医療技術の開発にもご遺体を使わせていただくことが可能になった。平成26年8月1日に総合研究棟の1階に解剖室（臨床解剖学ラボ：CAL）が完成した。このセンターは西日本では唯一の施設であり最新の医療機器を備えている。X線透視装置、CT、四肢用MRI、腹腔鏡手術機器等を用意し、さまざまなサージカルトレーニングや医学研究に対応できるようになっている（図5）。

CALの運営は解剖学教室の管理下で行われている。さらに、ご遺体を用いたサージカルトレーニングや医学研究を実施するにあたっては、関連する法律や倫理についての知識・理解が必須である。CALを利用するためにはセンターが開催するCAL講習会を受講するとともに、徳島大学病院の臨床試験研修セミナーを受講する必要がある。最も重要なのは、ご遺体に礼を失することなく、サージカルトレーニングや臨床研究を実施することである。

現在、実施中のサージカルトレーニングや臨床研究の課題は31例ある。「未固定遺体を用いた経皮的内視鏡視下腰椎椎間板ヘルニア摘出術の研究」、「未固定遺体を用いた神経筋超音波検査法の教育と研究」「未固定遺体を

用いた献腎摘出術の教育プログラム」「未固定遺体を用いた腹腔鏡下消化管・肝胆膵手術の教育と研究」「未固定遺体を用いた頭頸部内視鏡手術の教育と研究」「未固定遺体を用いた脳神経外科手術の教育と研究」「未固定遺体を用いた顎顔面領域の血管走行の教育と研究」「未固定遺体を用いた乳癌術後リンパ浮腫の原理及びセンチネルリンパ節の機能を解明する研究」「未固定遺体を用いた冠動脈血管内イメージングと病理組織および心臓周囲脂肪の関連に関する研究」「未固定遺体を用いた超音波ガイドの神経ブロック手技の習得及びブロック効果範囲の研究」「未固定遺体を用いた顔面血管（特に皮膚穿通枝）の解剖と侵襲の少ない新しい皮弁の先進的技術開発及び研究」「未固定遺体を用いた腹腔鏡下子宮悪性腫瘍手術の先進的技術開発及び教育と研究」等が実施されている。各臨床科の実施件数は整形外科（10件）、臨床神経科（1件）、泌尿器科（5件）、消化器・移植外科（1件）、耳鼻咽喉科（1件）、脳神経外科（1件）、口腔外科（2件）、内分泌・腫瘍外科（6件）、循環器内科（1件）、麻酔科（1件）、形成外科（1件）、産科婦人科（1件）である。平成26年度は7件、平成27年度は16件と年々実施数が増えており、今後も多くのサージカルトレーニングや臨床研究が予定されている。

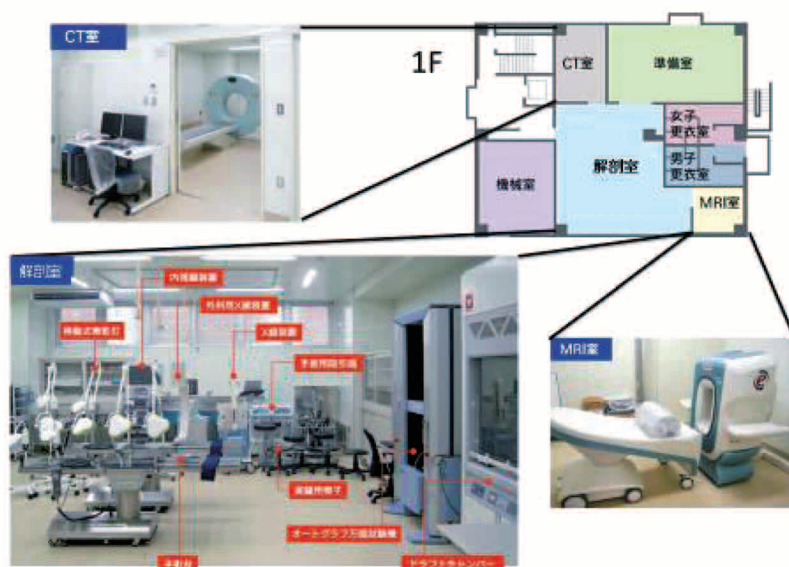


図5 総合研究棟1階の臨床解剖学ラボ平面図（306m²）

今後の展望

医学部・歯学部のカリキュラムで解剖実習は一回のみで3ヵ月程度の期間しかなく、短期間で人体構造の全てを理解することは困難である。医学生からは「もう一度、ご遺体を使って解剖の勉強をしたい」という声を聞く。もう一度、解剖学を学び直したいと思う学生、医師・歯科医師には、クリニカルアナトミー教育・研究センターの門戸を広く開き再度学習・修練する機会を設ける必要がある。しかし、このクリニカルアナトミー教育・研究センターを運営するためには、十分な「ご遺体」がなくては成り立たない。そのためには、一般社会にサージカルトレーニングの必要性を積極的に啓蒙し白菊会の活動をよく理解していただいて入会数を増やすことが重要である。

参考資料

- ・福井義浩：「解剖学教育と設備諸語」．徳大白菊, 29：3-5, 1996
- ・福井義浩：「臓器移植法と献体」．徳大白菊, 31：2-5, 1998
- ・福井義浩，住友哲二：「徳島大学納骨堂の増築計画」．徳大白菊, 43：13-14, 2010
- ・福井義浩：献体登録業務の現況と問題点－徳島大学白菊会の現況－．篤志献体, 55：101-103, 2013
- ・徳島大学白菊略年表．徳大白菊, 41：74-80, 2013
- ・坂井建雄：「ご遺体とご遺骨に関わる実務の地域性，今後の課題」．篤志献体, 58：96-102, 2016
- ・福井義浩：「クリニカルアナトミー教育・研究センター」の設置とその利用状況．徳大白菊, 49：13-14, 2016
- ・会員数の推移．徳大白菊, 49：72, 2016

Tokushima University Shiragiku-kai, a nonprofit organization operating a willed body donation program : Current activities and future direction

Hitomi Umemoto¹⁾ and Yoshihiro Fukui²⁾

¹⁾Education Support Room for Anatomy, Tokushima University, Tokushima, Japan

²⁾Department of Anatomy and Developmental Neurobiology, Tokushima University, Tokushima, Japan

SUMMARY

Shiragiku-kai, established in 1967, is a nonprofit organization whose members are individually registered for the willed body donation program at Tokushima University. Main activities of Shiragiku-kai include returning the remains after studies are complete, holding annual memorial services of donors, and organizing general and district assembly meetings. Currently, twelve clinical departments are conducting surgical training and clinical research in the Clinical Anatomy Laboratory utilizing donations. To meet the ongoing need for donations, it is essential to promote greater understanding among the general public and increase the number of registered members for this valuable program.

Key words : Shiragiku-kai, willed body donation, medical education, medical research, surgical training, recruiting activities